

学校名：横浜市立中川小学校

担当：第5学年

氏名：縄田 英愛

1. 今回の研修における目的やねらい

- ・事前学習で、子どもたちがタンザニアについて「知りたい」と思ったことや、子どもたちが抱いた疑問の答えとなる情報を集める。また、子どもたちがタンザニアの人たちに向けて作った、日本を紹介するカードなどを直接届けることで、つながりを感じられるようにする。
- ・子どもたちがタンザニアという国をイメージしやすいように、視覚にうったえるものや実物を手に入れる。
- ・教師自身が開発途上国と呼ばれる国の現状を知り、自分の言葉で感じたことを子どもたちに語るができるようになる。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

- ・子どもたちが「知りたい」と思っていたことについては、ホームステイの機会があったことで現地の方から聞くことができた。
- ・子どもたちにとって、親しみやすいと思われるティンガティンガの絵やカンガ（布）、カリンバ（楽器）を購入できたのは良かった。
- ・今回、タンザニアの方々だけでなく、現地で活動する協力隊員・専門家の方々、JICA職員の方々と出会えたことで、様々な角度から今のタンザニアについての思いを聞かせていただけた。教師としての自分を省みる、よい機会となった。

3. タンザニアから学んだこと

- ・事前研修の中で、「タンザニアの人たちは、あいさつをととても大切にすると聞いていたが、実際に現地に行ったことで、そのことを実感できた。目が合う時点で笑顔の人もいれば、シャイな人もいたが、こちらから「ジャンボ！」「ハバリ？」とあいさつをすると、どの人も顔がほころび笑顔を見せて返事をしてくれた。普段からあいさつとは、「あなたと向き合っています」「自分はここにいます」というメッセージを含んでいると考え、子どもたちに積極的にあいさつをするようにしているが、今回タンザニアで「迎えられる側・受け止めてもらう側」の立場になったとき、あいさつを交わすことで安心感を抱いたり、親しみの感情をもってくれる嬉しさを実感したりすることができたのは、改めてあいさつの大切さを感じる経験だった。
- ・特にホームステイを体験して実感したのが、家族や親戚だけでなく隣近所の人たちとのつながりの強さである。近所の子どもが遊びに来ていて、はじめはホームステイ先の子どもの一人かと思っていたが、そうではなかった。食事の時間になれば、そのまま特に声をかけることもなく一緒に食事をし、車に乗ってでかけるときに近所の子が一緒に乗り込んでいても当たり前のように一緒にでかける。その光景に日本との大きな違いを感じた。また、住んでいる通りによって、日本でいうところの消防団・隣組的な組織があるようで、若い年代の男性たちが地域の中で、例えば何か建物を作ったり修理したりするなどの活動を行っている聞いた。日本人の感覚からすると、不十分に思える生活でも、タンザニアの人たちにとっては不安感もなく十分な生活であり、相互扶助の精神やシステムが根付いていることが、「困っていることはない」というホストファザーの言葉に表れていた。日本人が手放しつつあった、人とのつながりが感じられる場面がタンザニアには十分あり、わずかな時間ではあるものの、その中に身をおいたことで「つながり」の大切さを実感することが

できた。帰国後、ぜひクラスの子どもたちに伝えたい、タンザニアの姿であった。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

今年度、総合的な学習の時間で「つながり」をキーワードに学習を進めている。夏休み前に本校の最寄り駅に飾られているアンゴラ共和国から贈られた壁画をきっかけにアフリカへの視点を投げかけ、アフリカについての調べ学習を行った。また、今回の研修が決まったことで、アフリカの一国であるタンザニアの人たちとつながる機会を得たことを伝えた。その後、一人ひとりがタンザニアについて知りたいことやタンザニアの人に伝えたいことを考え、子どもたち自身が「アフリカみんなであつながり隊！」と単元名を名付け、この単元を立ち上げた。

今後、研修で得た情報や現地で購入したタンザニアならではの物を使って、子どもたちの疑問に答えつつ、タンザニアと日本の違いや共通点について子どもたちに伝えていこうと思う。その過程で、さらに知りたいことや疑問が生まれたときには、今回出会った現地の方や協力隊員の方との橋渡しをし、子どもたちが主体性をもってこの学習に取りくめるようにしたいと考えている。

また、夏休み明けの朝会で司会を務める機会があったので、タンザニアで経験した「あいさつ」のことを全校児童に向けて話した。クラスの子どもたちに限るのではなく、機会を見つけて本校の子どもたちみんなにタンザニアのことを発信する場を設けたい。

こうした活動を通して、自分たちとは違う文化や考え方の中で生きている人たちの存在に触れ、多様性を受け入れたり、共感したりできる心情を育てることを目指す。また、自分たちが国境を越えたつながりの中で生きていること・生きてきたということを知り、クラスの子どもたちには担任を通してタンザニアの人たちにメッセージを伝えたという経験から、「自分もつながりを作ることができるのだ」という自信をもてるようにしたい。また、自分自身も教師として、一人の人間として、それらのことを目指し続けたい。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

まず、タンザニアというなかなか行けない国に行くことができ、そこで生活しているタンザニア人・日本人の方々と出会えたことが、今回の研修に参加してよかったことである。様々な形の援助を通して、タンザニアの人たちに日本が信頼されていることや、また協力関係を築くことができている場面をたくさん見ることができて勉強にもなった。まさに、「人づくり」の現場を生で見させていただき、心に響くものがあった。JICAの考える「人づくり・国づくり」という考え方は、私たち教師にも共通することが多くあり、日本から遠く離れた土地で奮闘されている、JICA関係者の方々の姿には、身の引き締まる思いがした。けれども、懇談会などで直接話してみると、みなさんとても人間味に溢れ、魅力的な方々ばかりであり、人生の先輩として様々な示唆を与えてくださった。

次に、普段であればあまり交流のない校種の先生方と一緒に、この研修に臨めたことはとても貴重な経験であった。タンザニアでの研修に向けての準備では、いろいろなアイデアや考え方が出てきて視野を広げることができた。また、研修の合間や移動時間にお互いの学校のことや普段考えていることなどを話すことができたのも、楽しい思い出となりました。勤務校以外の場で、教員同士のつながりができたことは、とても嬉しく思いこのつながりを大切にしていきたいと思った。

一点、今回山梨県の先生が1名だけだったので、海外研修後の授業実践などのことを考えると山梨県の先生も2、3名はいた方がいいのではないかと思った。

6. 海外研修での役割（各担当や日直）を振り返っての感想・提案など

どの係も大変だったと思うが、それぞれ自分の得意なことや好きなことに関係する係を率先して受け持ってくれたのでとてもありがたかった。また、係以外の人でも大変そうな時にはフォローした

り、手が回らないときには係以外の人にも遠慮することなくお願いしたりできたところは良かった。事前研修の場からの積み重ねで信頼関係を築いたり、相互理解がもてたりできたのではないかと考える。タンザニアでの研修を通して、さらに「チーム」になっていったように思う。

7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

タンザニアでの海外研修は今年で3年目ということで、渡航前に研修 OB/OG の方々やタンザニア経験者の方々にアドバイスをいただいたり、些細なことでも気になったことを相談できたりしたのはありがたいと感じた。緊張感があったものの、不安感なくタンザニアに行くことができた。

現地では、多くの JICA スタッフの方々がこの研修のために動いてくださっていることを、様々な場面で感じた。そこには、「仕事だから」というだけでない、それぞれの方々のタンザニアへの思いや、日本への思いが込められているように感じた。短い時間ではあったけれども、同じ日本人として、タンザニアでの時間を共有できたことに感謝します。

意見としては、研修参加者が10名というところに、同行の JICA 職員の方が一人というのは負担が大きかったのではないかと感じた。研修参加人数を減らすか、昨年度のように2名同行するのが良いのではないかとと思う。

8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

慣れない土地での研修は、日本にいるときには意識しないこと（安全面、水や食べ物）に気を遣うことが多く、後半になるにつれて体力的にも精神的にも厳しくなってくる人もいます。せっかくの貴重な経験をめいっぱい満喫するためにも、心身ともにいい状態を保てるように、心がけたり準備をしたりしておくといいのではないかと思います。

また、事前研修や現地での研修中にも予定の変更等がいくつかありました。どうしても押さえないところ以外は、あまり凝り固まらず、柔軟性をもつことも研修を充実したものにする秘訣だと感じました。

9. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
8月11日(月) -12日(火)	日本からタンザニアまでの 移動中および現地到着	夜中に出発だったので、思っていたよりも眠ることができた。乗り継ぎのドーハの空港で、イスラム教国ならではの設備やアラビア文字に興味があった。
8月12日(火)	JICA タンザニア事務所表敬 研修ブリーフィング	大西所長、友成次長が、とてもわかりやすく今のタンザニアの情勢や JICA 事業についてお話してくださった。タンザニアへの思いが強く伝わってきた。
8月12日(火)	本日の振り返り	普段、肌の色が濃い人たちと接しないのでドーハまではなんとなく構えてしまっていたけれど、少しずつ特別に反応しなくなっていく自分に気付いた。空港から外に出たときには、あまりにも日差しの強さに「アフリカ」を感じた。また、路上にたくさんの大人がいることに驚いた。無事にタンザニアに到着できてほっとした。
8月13日(水)	JICA タンザニア事務所	友成次長から、「生活者の目線で、タンザニアの

	研修ブリーフィング	<p>課題ととらえてきてほしい」とのお話があった。タンザニアの政治背景について、もう少し事前にタンザニアについて調べてくればよかった反省した。地理的な条件がタンザニア本土とザンジバルの歴史に影響していることについて、歴史は人が創るだけではないのだと感じ、他の国や日本はどのようなか調べてみたいと思った。また、「タンザニアは一つ」という思いのもと、ニエレレ大統領が推進した教育制度について、もっと知りたいと思った。</p> <p>教育分野についての話も興味深く、就学率が94%もあることに失礼ながら驚いた。改めて、自分の中の先入観や、これまで触れてきた情報の偏りを実感し、今回実際にタンザニアに来ることができたことへの価値の高さを感じた。</p>
8月13日(水)	ザンジバルへ移動	<p>フェリーに乗るまでの人の多さや「ジャパニジャパニ」と言われたりする状況に緊張した。フェリーの中には日本人は私たちしかおらず、いよいよ現地の人たちとの出会いが始まったな、と感じた。また、ダウン症と思われる人が港で働いていて、日本ではあまり見られない光景だったので印象に残った。雨でもないのに湿度が70%を越えていたことに驚いた。</p> <p>港にはダウ船と呼ばれる帆船と大型タンカーが停泊していて、危なくないのかと驚いた。</p>
8月13日(木)	隊員との懇談会	<p>次の日に見学させていただく沢谷隊員だけでなく、現職参加の上原隊員や活動期間が異なる隊員の方のお話が聞けた。みなさん熱い思いをもって活動に取り組んでいることが伝わってきた。ネットの環境はある程度整っているのに、生きていくために必要な水の環境が整っていないというギャップに不思議さを感じた。</p>
8月13日(水)	本日の振り返り	<p>同行してくださった大林所員やJOCVのみなさんがスワヒリ語を使って現地の方々とコミュニケーションをとっている姿に、単純に「すごいなあ」と思った。ホテルやレストランのスタッフの方々に、勇気を出して「ジャンボ！」と挨拶をしたら笑顔で応えてくれて嬉しかった。何もかもが初めてのことや驚くことだらけで、ここでの自分は子ども同然なのだということ実感し、それならそれで気負わずこの環境を楽しもうと思った。</p>
8月14日(木)	ムナジモジャ病院 沢谷隊員 活動視察	<p>まず、沢谷隊員がムナジモジャ病院のスタッフとして、タンザニア人の方や他の国からきている方々とよい関係を築きながら活動されていること</p>

		<p>が素晴らしいと感じました。リハビリ室の雰囲気も患者さんがリラックスできるような雰囲気だった。子ども用の部屋には、壁一面にティンガティンガの絵が描かれていた。病棟内の見学では、日本との違いに驚くことがたくさんあった。病院の夜もお母さんが付き添えることは、入院している子どもたちにとって安心できることだろうな、と思った。</p>
8月14日(木)	専門家との懇談会	<p>崎山専門家をはじめ、どの専門家の方々もとても魅力的な方々だった。プロジェクトへの思いなど、どの方に質問しても語る言葉は同じで、それだけチームとしての意思統一ができていたのだと感じた。また、そこまでしないと（日本側がぶれてしまうと）タンザニアの人たちと一緒にプロジェクトを推進していくのは難しい、とおっしゃっていたことが印象的だった。</p>
8月14日(木)	ザンジバル水公社（ZAWA）プロジェクトサイト視察	<p>日本では、見学することが難しい水源・井戸郡・配水池の見学をさせていただいた。水源であるムトニ湧水には、なぜか神聖さを感じた。水道設備について不勉強であったが、どの専門家の方々にも丁寧にわかりやすく、日本との比較をしながら施設の説明をしていただいたおかげで理解が深まった。</p>
8月14日(木)	本日の振り返り	<p>この日の見学場所は、山や森の奥の方だったので、向かう途中に現地の人々の家や生活を垣間見ることができ、その様子も興味深かった。野良にわとりが、民家の近くのいたるところにいたことには驚いた。</p> <p>また、どの場所にも日本の技術や機械が使われていて、日本の技術力の高さが他の国々で認められ、信頼されていることを子どもたちにぜひ伝えたいと思った。4年生の社会科で水道設備についての学習を行っているので、日本との違いにきっと子どもたちも驚くだろうと、反応が楽しみになった。</p>
8月15日(金)	ザンジバル水公社（ZAWA）プロジェクトサイト視察	<p>前日よりさらに現地の人たちの生活の場に近いところにある水道設備の見学だった。水道管が頭の上の方を通るなど、日本では考えられないことがたくさんあり、驚きの連続だった。</p> <p>水道メーターを設置した家庭にインタビューを行った際に、実際に家の中の水道や水をためているたくさんのポリタンクなどを見せていただけたことは貴重な時間だった。</p> <p>自分にはもったいない程の内容の視察をさせて</p>

		<p>いただき、また ZAWA の方々には快く歓迎していただき、感謝の念でいっぱいになった。ひとえに現地でザンジバルの方々と共に水問題と向き合い、共に汗を流している日本人の方々のおかげだと感じた。まさに JICA の掲げる「人づくり」とは、こういうことなのだと、実感できた二日間だった。</p>
8月15日(金)	ホームステイ先との交流	<p>私のホームステイ先は、ZAWA の職員であるハフィさんのお宅で、子どもが7人もいる大家族であった。家に着いたときに、幼い女の子たちが迎えに出てきてくれた。そのうちに男の子たちも帰宅し、しばらくの間、案内された部屋で一緒にスワヒリ語の本を見たり、風船で遊んだりした。あえてこちらから近づくことをしないで様子を見ていたが、遊んでいるうちに近くにきてくれるようになり、小学校で使っている教科書を見せてくれたり、数え歌を聴かせてくれたりした。今回、小学校への訪問のプログラムはなかったが、思いがけず現地の小学生のことを知る機会を得られてよかった。小さい女の子たちは遊んでいるうちに、被っていたスカーフを脱いで放り投げていたので、イスラム教の教えはあるもののやはり子どもにとっては、鬱陶しいものなんだな、どの国の子どもたちも変わらないな、とほほえましく感じた。</p> <p>食事の時にはフォークを出してくれたが、家族と同じように手を使って食べた。初めての経験であったが、特に抵抗感はなかった。人は環境に影響されるのだな、と思った。</p> <p>年上の娘さんたちが帰宅してからは、主に長女の娘さんが私の世話をしてくれて、次女の娘さんはあまり表に出てくることがなかった。客人への接遇は長女の役目である様子だった。</p> <p>食後に、ホストファザーにクラスの子どもたちからの質問を聞く時間をもったり、子どもたちが作った折り紙や日本を紹介するカードを渡したりした。折り紙を見て、絵や工作が得意な男の子が画用紙を使って花を作ってくれたのには驚いた。長女の娘さんが、お店で売っているという廃材を使った入れ物を一緒に作ったり、みんなで絵を描いたり、まるで親戚の家に遊びに来ているように感じた。</p>
8月16日(土)	ホームステイ先との交流	<p>車に乗って、親戚の家巡りをした。道路には日本の中古車がとてもたくさん走っていて、ハフィさんも「日本の車は性能がいいので、好きです」</p>

		<p>と言ってくれたのが、誇らしかった。親戚巡りで訪れた3つの家庭は、ハフィさんの「同じお父さんとお母さんのきょうだい」であると説明してくれた。日本ではこういう説明の仕方はしないので、イスラム教の文化が垣間見られた。</p> <p>採れたてのココナッツウォーターを飲ませていただく機会があり、その水の量に驚いた。水道水の確保が難しい中で、果物から水分を摂取するというのは現地の人の知恵なのだろうと感じた。</p> <p>最後に、家族+近所の子どもたち12人で動物園に行った。子どもたちがみんなトラックの荷台に乗っていたので、私は落ちないかと心配だったが、まったく気にならない様子ですごく楽しそうだった。</p> <p>また家の近くに下の女の子が通う小学校があり、この日は休校日であったがハフィさんが先生に連絡をしてくださり、校舎内を案内していただく機会を得た。掲示物などは、日本の小学校と共通するものもあり、やはり視覚に訴える教材が有効であるという認識は世界共通なのだと思う。建物はまだ建設途中ということで、2階に続く階段も途中まではできていたが、その上はまだ打ち放しのコンクリートで驚いた。</p> <p>短い時間であったが、現地の人たちの普段の生活を一緒に体験することができ、とても新鮮で楽しい二日間だった。</p>
8月16日(土)	教材購入	<p>ゆっくりホテルに戻ってきたので、教材購入には行かなかった。</p>
8月16日(土)	本日の振り返り	<p>お互いのホームステイ先でのことを、簡単に話した。同じザンジバルの家庭でも、本当に様々なのだと感じた。</p> <p>また、併せてZAWAについての振り返りも行い、自分が聞くことができなかった情報を聞くことができてよかった。自分と同じように、他のメンバーもZAWAの事業には深い感銘を受けていた様子が感じられた。</p>
8月17日(日)	ダルエスサラームへ移動	<p>元気に研修の後半を迎えることができ、フェリーでの移動もデッキに出て海や空の風景を楽しむことができた。行きには気づかなかった大きな建物を見つけ、ザンジバルとダルエスサラームのギャップも感じた。ダルエスサラームの港に近づくと、溢れんばかりの人たちが乗っている船が何艘</p>

		もあり人々のエネルギーを感じた。
8月17日(日)	モロゴロへ移動	<p>ワゴンでモロゴロへ移動した。移動中はほとんど寝て過ごした。</p> <p>移動後、現地で活動中の稲村隊員と赤堀隊員に市場を案内していただいた。赤堀隊員の生徒に会うことができたり、普段食事をしているお店を教えてくださいいただいたり、現地の方に親しまれていることがよくわかった。</p> <p>市場には日本では見ることのない台所用品がたくさん売られており、何に使うのかを教えてもらわないと使い道がわからないものも多く、見ていて楽しかった。</p> <p>カンガのお店では、たくさんの柄のカンガが置いてあり、ずいぶん迷ってしまった。購入の際にスワヒリ語で値切ることに挑戦した。</p>
8月17日(日)	隊員との懇親会	<p>懇親会では、活動している学校の先生や生徒の様子や活動の難しさなど、いろいろなお話を聞くことができ勉強になった。</p>
8月17日(日)	本日の振り返り	<p>徐々にメンバー間でも疲労が見られてきた。意識して、お互いの体調を把握するよう努めた。</p>
8月18日(月)	キラカラ中等学校 稲村隊員 活動視察	<p>キラカラ中等学校は、女子中学校ということでガールズパワーに溢れていた。交流の時間を楽しみにしてくれていた様子が伝わってきて、嬉しく思った。自分の名前を日本語で書いてもらったり、日本についての質疑応答の時間には、直接、生徒のみなさんと言葉を交わしたり、笑顔を交わすことができ嬉しく思った。英語での説明が十分にできず申し訳なく感じたが、簡単な英語でできたことを笑顔で褒めたり、目を見て名前を呼んだりすることで補った。言葉や日本の常識が通じない場では、低学年を担当した経験が生かせたと、自分では感じた。記念撮影後に一人の生徒が名前を呼んで近づいてきてくれて、この日の感想や将来日本で学んでみたいと思う、ということ話を話してくれてとても嬉しかった。</p> <p>また、交流後には忙しい中でもチャイの場を設けていただき、タンザニアのおもてなしに触れることができた。</p> <p>事前の校内での調整や、さまざまな配慮を稲村隊員がしてくださったおかげで、貴重な交流の場をもてたことは大変ありがたいことだと感じた。</p>

8月18日(月)	ダルエスサラームへ移動	<p>再びワゴンで移動した。モロゴロではきれいな山々やずっと遠くまで見渡せるような平地が広がっていて、アフリカの雄大さを感じた。やはり野生の動物を直に見てみたかった、と思った。</p> <p>自然が多いところでも、思っていた以上に電線が通っていたので、次の日の TANESCO への視察が楽しみに思えた。</p> <p>ダルエスサラームに近づくにつれて、人の様子も道路の様子も変わっていき、ダルエスサラームは都会であることを感じた。</p>
8月18日(月)	本日の振り返り	<p>キラカラ中等学校で、それぞれが見聞きしたことや交流の際に出た質問内容などの情報共有を行った。自分では気づかなかったことも、中高の先生方から聞かせていただくことができて興味深かった。</p>
8月19日(火)	タンザニア電力供給公社 (TANESCO) プロジェクトサイト視察	<p>長坂専門家と小田桐専門家が、一からこの職業訓練校のカリキュラムや教材を作り、教育システムを作り上げたことに本当に驚いた。「Work together, Learn together, Grow up together」という言葉を掲げているということをお話してくださったが、この日までに私たちが触れてきたタンザニアの生活や文化の様々な違いを考えると、簡単にできることではなく、しかしそれでもこの言葉をタンザニアの将来のことを思い、日本人とタンザニア人との共通意識として示すということへの強い思いを感じた。長坂専門家も小田桐専門家もとても穏やかな人柄であったが、お二人の口から聞かせていただく、これまでの TANESCO でのプロジェクトの軌跡や現在行っている事業、これからの展望についてのお話には、日本の技術者としての凄みを感じた。また、そこで働くタンザニアの方々がそれに適うだけの誇りをもっていることを、マネージャーのドロシーさんの言葉や施設内を案内していただいたときの職員の方の姿から感じた。</p>
8月19日(火)	教材等購入	<p>クラスの子どもたちがタンザニア独自の文化を知りたがっていたので、ティンガティンガ村では、絵と手のひらサイズのプレートを購入した。同じ学年の先生方の名前や学校名を入れてもらい、受け持ちのクラスの子ども以外の子どもたちの目にも触れられるようにしようと考えた。</p>

		<p>その後に移動した場所には、本屋やスーパーマーケットなどいろいろな店舗が集まっていたので、絵本や楽器などクラスの子どもたちが親しみそうなものを探して購入した。</p>
8月19日(火)	本日の振り返り	<p>タンザニアでの研修も残り少ない時間となり、多くの貴重な経験をさせていただいていることに感謝とともに、自分が帰国後に十分にこの経験を生かし、子どもたちに伝えられるのかも不安に感じた。与えていただいたものが大きすぎて、まったく考えがまとまらない状態であった。</p> <p>ただひとつ、私たちが出会わせていただいたタンザニアの人たちにとって、私たちはもしかしたら一生のうちに出会う唯一の日本人であるかもしれず、この国におじゃまさせていただいている者として恥ずかしくないよう、感謝の気持ちをもってこの研修を終えたいということだけは、自分のなかではっきりしていた。</p>
8月20日(水)	JICA タンザニア事務所 報告会	<p>本当に充実した9日間であったため、研修で感じたことや学んだことをまとめるのに苦労した。</p> <p>学校現場では、「子どもが種で、家庭が土であり、教師は水である」というような例えをすることがあるが、今回私たちが出会った方々は、今のタンザニアにとっての「水」であるのだと感じた。</p> <p>そして「互いを知り、共に生きる」ということは、同じ風景の中で過ごし、また同じ風景を思い描くことができる、ということなのだ、この研修を通じて学んだ。</p> <p>友成次長からは、帰国後、子どもたちにタンザニアでの経験を伝える際のアドバイスをいただいた。「見てきた人が、楽しそうに話すことが大切」だとおっしゃっていたが、まさに友成次長が私たちに見せてくださった姿であり、最後の最後まで多くの示唆を与えてくださったことに感謝の思いを深めた。</p>
8月20日(水)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	<p>大使への研修報告ということで、初めはとても緊張した。岡田大使より私たちが今回の研修では知ることのなかったタンザニアを、様々なエピソードを踏まえ、お話してくださったことで、さらにタンザニアへの興味が高まった。また、タンザニアと日本、神奈川とのつながりについても教えていただいたので、子どもたちがタンザニアに興</p>

		<p>味をもつきっかけとして生かしていきたいと思った。</p> <p>また、国際社会における日本の競争力の低下についてのお話もあり、特別に意識しなくとも世界に目を向けることのできる感覚を育てていくことも、私たち教師の役割のひとつであると感じた。</p>
8月20日(水) -21日(木)	タンザニアから日本までの移動中および日本到着	<p>飛行機からキリマンジャロと思われる山のシルエットが見えて、その美しさに感動した。町の灯りが、都市や国によって明るさが違ったり、電灯の量が違ったりしたことも印象に残った。成田に近づくにつれて、ほっとする気持ちと、日本はどれほどの電気を使っているのだろうか、と複雑な気持ちが入り交じった。</p> <p>全員が笑顔で帰国でき、本当によかったと思った。共に過ごした10日間を思い、感謝の気持ちでいっぱいであった。</p>